

幼児の怖いもの見たさ行動を規定する要因の検討

富田 昌平¹・伊藤 梓²・園田ひかり³

A Study of Factors that Influence the Desire to See Frightening Things in Early Childhood

Shohei TOMITA¹, Azusa ITOH², Hikari SONODA³

Abstract: Previous studies (Tomita and Noyama, 2014) have shown that although the desire to see frightening things increases until the end of early childhood, this indicates that 5–6-year-old children do not choose to see a lot of scary things (when there are 5–6 out of 10 opportunities to choose). In this study, we examined the factors that regulate the desire to see frightening things in the case of young children. In Study 1, we targeted 40 children (4–6 years old) and examined whether the difference in the availability of scary images influences their desire to see them. More specifically, we presented images of things that are not scary in advance—as the preset condition—and then used tasks where the image was projected onto a card and a box; we then compared the differences in the number of choices to view scary things. In Study 2, we targeted 82 children (4–6 years old), and examined whether differences in the degree of willingness to take on challenges based on a sense of security influenced their desire to see frightening things. In this context, we first had them tackle the task alone—as the preset condition—and then tackle it with others; next, we compared the differences in the number of choices to view scary things. The results of the two studies show that although the availability of images and the willingness to take on challenges based on a sense of security both influence the desire to see frightening things, the manner in which they exert an influence differs for males and females.

Key words: Frightening Things, Imagination, Challenges, Gender Differences, Early Childhood

問題と目的

子どもは最初、大きな音や騒がしい音、見知らぬもの・人・場所、高い所など現実の脅威に対して恐怖を抱き、さらに2歳から4歳の間には、徐々に想像上のもの、空想的なもの、暗闇など想像上の脅威に対しても恐怖を抱くようになることが知られている (Jersild, 1968/1972; 富田, 2017)。その一方で、怖いお化けが登場する絵本を繰り返し読んで欲しがったり、押し

入れや倉庫などの薄暗い場所に恐ろしい怪物がいるふりをして楽しんだりするなど、怖いものを怖いと知りながらもあえて見たり近づいたりする行動が見られるようになるのもまた、2歳半ば頃からであることが報告されている(今井, 1990; 田代, 2001; 富田, 2016)。このことから、子どもは2歳頃から怖いものを想像し始めると同時に、それらを飼い馴らし楽しむ術も少しずつ習得していくことが考えられる。

しかし、2, 3歳児における怖いもの見たさ行動は、多くの場合、大人や仲間の介入を必要とするようである。富田(2016)は、ある2歳児クラスにおける怖いものを楽しむ遊びの1年

1 三重大学教育学部
2 株式会社メディカル一光
3 名古屋市立保育園

間のエピソードを分析した。その結果、保育者自身による遊び込みや子どもの仲間関係の構築、困難に打ち勝つための武器や能力の獲得、仲間同士の物語イメージの共有、大人や仲間とのパターン化されたやりとりの反復など、子どもたちが安心して怖いものを楽しむための手立てを保育者が様々に工夫して行っていることを明らかにしている。

また、富田・野山（2014）は、怖いもの見たさとは、「虚構と現実の区別を認識し、虚構の安全性を理解した上で、『現実ではない』『でも、もしかしたら』と現実性の揺らぎを楽しむ遊び」（p.292）であると述べている。そして、5、6歳頃までに想像と現実、見かけと本当、ごっこと現実、空想と現実など、虚構と現実の区別が可能になることから（e.g., DiLalla & Watson, 1988; Flavell, Green, & Flavell, 1986; Taylor & Howell, 1973; Wellman & Estes, 1986）、子どもが大人や仲間の介在なしに単独で怖いものを楽しむようになるのもまた、5、6歳頃からではないかと予測している。

この点について検討するために、富田・野山（2014）は、保育園の年少児、年中児、年長児を対象に、怖いカードと怖くないカード2枚を伏せて提示し、1枚だけ見ることができるとしたらどちらが見たいかを尋ねる怖いカード選択課題を行った。また、虚構と現実の区別との関連を探るために、見かけ／本当の区別課題と想像／現実の区別課題も併せて行った。その結果、年長児は年少児よりも怖いカードをあえて選択する怖いもの見たさ行動を有意に多く示し、また、こうした怖いもの見たさ行動は想像／現実の区別の成績と有意な関連があることを明らかにしている。

富田・野山の研究は、これまで明らかにされてこなかった幼児期の怖いもの見たさの心理の発達に関する1つの証拠を示した点、及び、そうした心理発達の背景に虚構と現実の区別の発達に関わっていることを明らかにした点で意義があると言える。しかし、彼らの研究では、怖いカード選択は年長児でも10回のうち平均5、6回程度に過ぎず、残りの4、5回は怖くないカードを選択した。また、10回のうち7回以上で怖いカードを選択した者は、年長児でも23%に過ぎなかった。なぜ虚構と現実をある程度区別している年長児であっても、怖いカードを数多く選択しなかったのであろうか。単に怖いものがあまり好きではない、あるいは、怖いもの

だけでなく怖くないものに対しても好奇心が働いたためなど、様々な理由が考えられるが、ここでは特に考えられる2つの可能性について検討を試みることにする。

第1に、想像の利用可能性の問題である。Harris（2000）は、人は何かを想像すると、その想像した事柄についての利用可能性が心の中で相対的に高まり、想像したことが現実になるという主観的な見込みが増大するという想像の利用可能性仮説を提唱している。富田・野山の研究では、子どもは2枚のカードを伏せた状態で提示され、一方には怖いものが描かれており、もう一方には怖くないものが描かれていると指示された。その時、子どもはそこに描かれているであろう怖いものを想像したと考えられるが、事前にそれについての明確なイメージを提示されていないため、怖いものについての想像の利用可能性が彼らの心の中で高まり、想像したことのリアリティが次第に増大していった結果、怖いカードの選択が避けられた可能性が考えられる。そこで本研究の実験1では、1つ目の操作として、事前に怖いもの／怖くないもののイメージを提示するイメージあり条件と、それらを提示しないイメージなし条件とを設定し、怖いもの選択の量について条件間の比較を行う。仮説として、もしも事前のイメージ提示による想像の利用可能性の低下によって怖いもののリアリティが減退するのだとすれば、イメージあり条件ではイメージなし条件よりも、怖いものをあえて選択する怖いもの見たさ行動が多く示されるであろう（仮説1）。

2つ目の操作として、怖いもの／怖くないものについての想像を投射する対象の空間的な拡がりに注目する。富田・野山の研究では、想像を投射する対象としてカードが使用されたが、カードは空間的な拡がりのない2次元の対象であるため、その中に怖いものを想像し難く、その意味では想像の利用可能性が低くなる可能性が考えられる。例えば、Harrisら（Harris, Brown, Marriott, Whittall, & Harmer, 1991; Johnson & Harris, 1994）は、幼児における想像と現実との境界の揺らぎを検討するために、空っぽの箱の中に怪物を想像させるという実験を行っているが、このように想像を投射する対象が空間的な拡がりのある箱の場合には、その中に怖いものを想像し易いため、カードと比較して想像の利用可能性が高くなることが考えられる。そこで本研究の実験1では、2つ目の操作として、想

像を投射する対象がカードである課題と箱である課題とを用意し、怖いもの選択の量について課題間の比較を行う。仮説として、もしも想像を投射する対象の空間的な拡がりによる想像の利用可能性の上昇によって怖いもののリアリティが増大するのだとすれば、箱選択課題ではカード選択課題と比べて、怖いもの見たさ行動があまり観測されないだろう（仮説2）。

第2に、安心感に基づく挑戦意欲の問題である。富田・野山の研究では、怖いもの／怖くないもの選択判断を求めているが、これは言い換えれば、怖いものに立ち向かい挑戦することができるかどうかを問う課題であるとも言える。その場合、怖いものに立ち向かうかどうかの判断を単独の状況で求められたことで不安を強く感じ、怖いもの選択が避けられた可能性も考えられる。例えば、竜や河童などの空想上の存在が身近な周辺環境に現実にいるかもしれないと信じて探索・探究を繰り返す想像的探険遊びの保育実践記録では、しばしば仲間の存在が安心感を生み、怖いものに対しても勇敢に立ち向かっている様子が描かれている（e.g., 安曇・吉田・伊野, 2003; 岩附・河崎, 1987; 富田, 2018; 吉田, 1997）。仲間と一緒にであれば、勇気を持って怖いものにも立ち向かうことができるのかもしれない。この点に関しては、すでに來山（2016）が同様の観点から、複数人のグループによる怖いカード選択課題を実施し、検討しているが、グループによって人数が異なっていたことと、グループ条件のみの実施で、単独条件との比較が行われていなかったことから、十分な結論が得られていない。そこで本研究の実験2では、子どもの怖いもの見たさ行動において、安心感に基づく挑戦意欲が関係しているかどうかを検討することとする。具体的には、怖いカード選択課題に1人で取り組む単独条件と2人で取り組む複数条件とを設定し、怖いもの選択の量について条件間の比較を行う。仮説として、もしも単独ではなく複数で取り組んだ方が仲間のいる安心感から怖いものにも立ち向かい易いのだとしたら、複数条件では単独条件と比べて、怖いもの見たさ行動が多く示されるであろう（仮説3）。

加えて、富田・野山の研究では、怖いものと怖くないものという恐怖感情の両端の強度の選択肢が設定され、二者択一が求められていたが、中程度の怖さの選択肢がないことによって、怖いものが避けられ易かった可能性が考えられ

る。そこで本研究の実験2では、この点についても検討するため、中程度の怖さとして「ちょっとだけ怖い」という選択肢を設定し、これにより怖いもの見たさ行動が増加するかどうかを検討する。仮説として、もしも中程度の怖さの選択肢があることで安心感が生じ、挑戦意欲が増すのであれば、中間選択肢がある条件の方がそれが無い条件よりも、怖いもの見たさ行動が多く見られるに違いない（仮説4）。

また、富田・野山の研究では、怖い／怖くないお化けまたは動物のカード各10枚すべてを最終的に子どもに提示した後、それぞれにもしも2枚だけ持ち帰ることができるとしたら、どのカードを選択するかを尋ねた。その結果、男児は女児と比べて、怖いお化けや動物を選択することが有意に多いことが示されている。加えて、全般的に女児は男児よりも恐怖を示し易く、女児が怖がり忌み嫌うような対象に対して、男児は好んでかわりを持つことが報告されている（Hurlock, 1964/1971）。幼児期の恐怖対象の発達的变化について調べた富田（2017）による最近の研究でも、男児は女児と比べて怖がる対象が少ないことが報告されている。これらのことから、本研究でも同様に、怖いもの見たさ行動は男女で違いがあり、男児の方が女児よりも怖いものを選択する傾向が高いことが予想される。また、想像の利用可能性や安心感にもとづく挑戦意欲の影響の仕方も、男女によって異なる可能性も考えられる。本研究では、こうした男女差についても併せて検討することとする。

なお、富田・野山の研究では、年少児、年中児、年長児を対象としているが、怖いもの見たさ行動に関して年少児と年長児の間には有意差が見られたものの、年中児と年長児の間には有意差が見られなかった。そこで本研究では、怖いもの見たさ行動がより多く見られるであろう年中児と年長児を合わせて対象とし、実験を行うこととする。

実験1

方法

対象児：三重県内の私立保育園1園と公立幼稚園1園、及び愛知県内の公立幼稚園1園に在籍する幼児40名（男児20名、女児20名、平均年齢5歳6か月、年齢範囲4歳6か月～6歳6か月）を対象とした。内訳は、年中児16名（男児9名、女児7名）、年長児24名（男児11名、女児13名）であった。これらの幼児はイメージ

あり条件とイメージなし条件にそれぞれ20名(男児10名, 女児10名)ずつ分けられた。両条件の年齢比はほぼ同じであった。

材料: カード選択課題に使用するカードは全部で4枚であった。2枚はイメージあり条件での事前のイメージ提示段階において使用するカードであり, 残り2枚は本試行段階において使用するカードであった。2枚はそれぞれ怖いカードと怖くないカードであった。怖いカード2枚はいずれも漫画家・水木しげる氏による絵であり, 陰影のある筆づかいと暗い配色で恐ろしい妖怪がリアルに描かれていた(赤舌, おとし)。怖くないカード2枚はいずれもインターネット上のフリー素材サイトの画像によるものであり, 単純な線と明るい配色でお化けや妖怪が可愛らしく描かれていた(幽霊, 河童)。カードは縦15cm×横10cmのカラー刷りで, カードの裏面には対象児が選択する際にカードの見分けがつくように, 2cm四方の表情図(怖い/怖くない)がシンボルとして中央に記されていた。

箱選択課題に使用する箱と内容物は全部で4セットであった。2セットはイメージあり条件での事前のイメージ提示段階において使用するものであり, 残り2セットは本試行段階において使用するものであった。2セットはそれぞれ怖いフィギュアが含まれた箱と怖くないぬいぐるみが含まれた箱であった。怖いフィギュア2体はいずれも危険な動物をリアルに再現したものであった(ヘビ, クモ)。怖くないぬいぐるみ2体はいずれも可愛らしい動物を模したものであった(クマ, ウサギ)。箱は縦19cm×横19cm×高さ16cmであり, 全体が黒色の画用紙で覆われていた。上部に蓋があり, 蓋の表面には対象児が選択する際に箱の見分けがつくように, 2cm四方の表情図(怖い/怖くない)がシンボルとして中央に記されていた。フィギュアやぬいぐるみはいずれも箱に入る大きさであり, 箱の内側は見え易いように薄橙色の画用紙が貼られていた。

また, 怖さの程度を評価するために, 大きな丸い円(すごく怖い)と小さな丸い円(ちょっとだけ怖い)が描かれたA4サイズの紙を用意した。

手続き: 対象児に対して5分程度の個別実験を行った。対象児に名前, 年齢, 所属クラスについて尋ねた後, カード選択課題と箱選択課題の2つの課題を行った。課題の順序はカウンターバランスをとった。イメージあり条件のみ,

事前に怖いもの/怖くないものについてのイメージを提示する手続きを行った。

なお, 実験者(第3著者)は事前に1~2日間ほど協力園で対象児たちと一緒に過ごし, ラポールを形成した上で実験を行った。実験者は幼稚園教諭一種免許状の取得に関わる全ての実習を終了しており, 幼児と関わることに慣れていた。実験中の対象児による回答や様子は面接シートにその場で記入し, 補完するためにICレコーダーでも記録した。

まず, 実験者は今からカードや箱を使った簡単な質問を行うことを対象児に伝えた後, イメージあり条件の対象児には, 2枚のカードを伏せた状態(あるいは2つの箱を蓋が閉じた状態)で提示し, 一方を指さして, 「こちらのカード(または箱)にはすごく怖いものが描かれています(入っています)。すごく怖いってどんなものだと思う?」と尋ねた。対象児が怖いものをイメージし, 自らの考えについて述べた後, 実験者は「見てみようか」と声をかけ, 一緒にカードや箱の内容を確認した。見終わると, 「見てみて, どう思った?」と尋ね, 実際の内容に対する感想を求めた。次に, 「怖かった?それとも怖くなかった?」と尋ね, 「怖かった」と回答した場合には, 大きな丸い円と小さな丸い円が描かれた紙を提示して, 「すごく怖かった?(大きい円を指差す)それとも, ちょっとだけ怖かった?(小さい円を指差す)」と尋ね, どちらかの円を指差すように求めた。続けて, もう一方を指さして, 「こちらのカード(または箱)には全然怖くないものが描かれています(入っています)。全然怖くないってどんなものだと思う?」と尋ねた。その後の手続きは同様であった。なお, 怖いものと怖くないものの提示順序はカウンターバランスをとった。

次に, 本試行として, カード選択課題と箱選択課題を実施した。ここまで使用したカードや箱はテーブルの下にしまい, 新たなカードや箱を提示した。イメージなし条件の対象児には, 事前のイメージ提示を行わなかったことから, この段階から実施した。実験者は対象児の前に, 2枚のカードを伏せた状態(あるいは2つの箱を蓋が閉じた状態)で提示し, 一方を指さして, 「こちらのカード(または箱)にはすごく怖いものが描かれています(入っています)」と言い, 次にもう一方を指さして, 「こちらのカード(または箱)には全然怖くないものが描かれています(入っています)」と言った。続けて, 「どち

らか1つだけ見ることができるとしたら、どちらが見たい？」と尋ねた。対象児がいずれか一方を選択すると、「どうしてそのカード（または箱）を選んだの？」と選択理由を尋ね、対象児が理由を述べた後、実際にその内容を見るように求めた。その後、イメージ提示段階の手続きと同様に、実際の内容に対する感想と怖さの程度について評価を求めた。なお、カード選択課題と箱選択課題、及び怖いものと怖くないものの提示順序はカウンターバランスをとり、左右の配置もランダムとした。

本実験は行うにあたって事前に園長、担任教諭及び保育士に実験内容を説明し協力を求め、了解を得た上で実施した。統計処理にはjs-STAR version 9.7.8jを使用した(実験2も同様)。

結果と考察

イメージ提示の効果： 怖いものについてのイメージを事前に提示することによって、想像の利用可能性が低下し、怖いもの見たさ行動が増加するのかどうかを検討する。カード選択課題と箱選択課題という2つの課題における選択パターンは、(a) 2つの課題でともに怖いもの選択を行った場合(怖い2回)、(b) 2つの課題のいずれか一方のみで怖いもの選択を行った場合(怖い1回)、(c) 2つの課題いずれも怖いもの選択を行わなかった場合(怖い0回)という3つに分類された。Table 1は、条件別及び男女別の選択パターンの出現度数を示したものである。イメージあり条件とイメージなし条件での選択パターンの違いについて検討するために、2(条件)×3(選択パターン)の χ^2 検定を行ったところ、有意傾向が確認された($\chi^2(2)=5.89, .05 < p < .10$)。残差分析の結果、イメージあり条件ではイメージなし条件よりも、「怖い2回」が有意に多いことが示された($p < .05$)。このことは、事前のイメージ提示が怖いものについての想像の利用可能性を低下させ、怖いもの選択を促したことを示唆するものであり、本研究の仮説1を支持するものであった。

想像を投射する対象の空間的拡がりの効果： 怖いものについての想像を投射する対象をカードではなく空間的な拡がりのある箱にすることによって、想像の利用可能性が高まり、怖いもの見たさ行動が減少するのかどうかを検討する。Table 2は、条件別及び男女別の怖いもの/怖くないもの選択の出現度数を示したものである。怖いもの選択に関して、カード選択課題で

Table 1 イメージあり/なし条件別及び男女別の各選択パターンの出現度数

	イメージあり条件			イメージなし条件		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計
怖い2回	5	2	7	0	1	1
怖い1回	5	5	10	8	5	13
怖い0回	0	3	3	2	4	6
合計	10	10	20	10	10	20

Table 2 カード/箱選択課題別及び男女別の各選択の出現度数

	カード選択課題			箱選択課題		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計
怖い	10	13	23	13	3	16
怖くない	10	7	17	7	17	24
合計	20	20	40	20	20	40

は40名中23名(58%)であったのに対し、箱選択課題では40名中16名(40%)というように、カードよりも箱の方が怖いもの見たさ行動が少なかった。しかし、両課題は対応のあるデータを扱っているため、統計的な検討を行うために、子どもを次の4つに分類した。(a) 2つの課題でともに怖いものを選択した者(8名)、(b)カード選択課題では怖いものを選択したが、箱選択課題では怖いものを選択しなかった者(15名)、(c)箱選択課題では怖いものを選択したが、カード選択課題では怖いものを選択しなかった者(8名)、(d) 2つの課題でともに怖いものを選択しなかった者(9名)。続けて、(b)と(c)の出現度数に対してサイン検定を行った。その結果、有意差は見られなかった。以上から、想像を投射する対象の空間的な拡がりが怖いものについての想像の利用可能性を高め、怖いもの選択が促されるという仮説2は支持されなかった。

男女差： 男児は女児よりも怖いもの見たさ行動を示す傾向にあるのかどうか、及び、想像の利用可能性の操作による影響の受け方は、男女によって異なるのかどうかを検討する。まず、イメージ提示の条件ごとの男女差について検討するために、Table 1の結果をもとに、条件ごとに2(性別)×3(選択パターン)の χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意差は見られなかった。また、男女ごとにイメージ提示の有無による影響を探るために、男女ごとに2(条件)×3(選択パターン)の χ^2 検定を行ったところ、女児では有意差は見られなかったものの、男児では有

意差が確認された ($\chi^2(1) = 7.69, p < .05$)。残差分析の結果、男児ではイメージあり条件の方がイメージなし条件よりも怖いものを選択を多く行ったことが示された ($p < .05$)。このことは、イメージの提示によって怖いものについての想像の利用可能性が低下した時、女児ではそうではないものの、男児ではあえて怖いものを選択しようとする傾向が高まることを示唆している。

次に、課題ごとの男女差について検討するために、Table 2の結果をもとに、課題ごとに2(性別)×2(選択)の χ^2 検定を行ったところ、カード選択課題では有意差は見られなかったが、箱選択課題では有意差が確認された ($\chi^2(1) = 8.44, p < .01$)。残差分析の結果、箱選択課題では男児の方が女児よりも怖いものを選択を多く行ったことが示された ($p < .01$)。また、男女ごとに想像を投射する対象の違いによる影響を探るために、先述と同様に対応のあるデータであることから、子どもを(a)～(d)に分類した上で、(b)と(c)の出現度数に対してサイン検定を行った。その結果、男児では各出現度数が(a) 5名、(b) 5名、(c) 8名、(d) 2名であり、サイン検定の結果、有意差は見られなかったものの、女児では各出現度数が(a) 3名、(b) 10名、(c) 0名、(d) 7名であり、サイン検定の結果、有意差が見られた ($p < .01$)。このことは、想像を投射する対象をより空間的な広がりのある箱にすることで、怖いものについての想像の利用可能性が高まった時、男児ではそうではないものの、女児では怖いものをできるだけ避けようとする傾向が高まることを示唆している。つまり、仮説2が部分的に支持された。

実際の内容に対する言及と怖さの評価： イメージあり条件では、イメージ提示段階においてカードや箱の実際の内容を確認する前に、怖いもの／怖くないものとはどのようなものかについて何らかの考えを述べるように求めた。20名のうち怖いものに関して何らかの回答(「怖いもの」など単に繰り返すだけの回答を除く)を提供できた者は、カードで13名(65%)、箱で11名(55%)であった。これら24件の回答のうち、最も多く見られた言及は「お化け」(5件)であり、次いで「クモ」(3件)、「ミミズ」(2件)、「びっくり箱」(2件)であった。その他の回答も含めて、お化けや妖怪、危険または気味の悪い動物が多く挙げられた。怖くないものに関しては、何らかの回答を提供できた者は、カードで11名(55%)、箱で12名(60%)であり、

これら23件の回答のうち、最も多く見られた言及は「かわいいもの」(5件)、次いで「ウサギ」(4件)であった。その他の回答も含めて身近なペット動物が多く挙げられた。なお、1つの回答には複数の言及が含まれていた(以下、同様)。

次に、実際の内容を確認した後、それに対する感想を求めたところ、怖いものに対して何らかの回答を提供できた者は、カードで13名(65%)、箱で19名(95%)であった。これら32件の回答は、「ヘビ」「クモ」「お化け」など内容物の名称についての言及(21件)、「怖い」「怖くない」「びっくり」など自己の感情についての言及(15件)、「面白い」「かっこいい」など内容物の外見についての言及(5件)の3つに分けられた。また、怖くないものに対して何らかの回答を提供できた者は、カードで18名(90%)、箱で12名(60%)であった。これら30件の回答も同様に、「お化け」「クマ」「ウサギ」など内容物の名称についての言及(25件)、「怖くない」など自己の感情についての言及(5件)、「かわいい」「ふかふか」など内容物の外見についての言及(22件)の3つに分けられた。

さらに、実際の内容に対して、「すごく怖い」「ちょっとだけ怖い」「全然怖くない」の3段階で怖さの評価を求めた。Table 3は、イメージ提示段階における実際のカード／箱の内容に対する各怖さ評価の出現度数を示したものである。怖くないもの内容に関しては、カードと箱ともに全ての子どもにおいて「全然怖くない」と評価されたのに対し、怖いもの内容に関しては、カードで8名(40%)、箱で4名(20%)の子どもにおいて「すごく怖い」もしくは「ちょっとだけ怖い」と評価されていた。このことから、実際の内容に関しても、怖いものは怖くないものと比較してより怖いと感じられるものであったことが示された。一方で、怖いものも多くの場合、「全然怖くない」と評価されており、子どもに深刻な怖さを与えるものではなかったことも確認された。

カード選択課題と箱選択課題でも同様に、子どもに怖いものと怖くないもののいずれかを選択させた後に、実際の内容を確認させ、それについて3段階での怖さの評価を求めた。Table 4は、選択された怖いもの／怖くないものに対する各怖さ評価の出現度数を示したものである。やはり同様に、怖いものは怖くないものよりも、実際の内容も怖いものとしてより高く評価され

Table 3 イメージ提示段階におけるカード／箱の実際の内容に対する各怖さ評価の出現度数

	カード選択課題		箱選択課題	
	怖いもの	怖くないもの	怖いもの	怖くないもの
すごく怖い	3	0	2	0
ちょっと怖い	5	0	2	0
全然怖くない	12	20	16	20

Table 4 選択された怖いもの／怖くないもの実際の内容に対する各怖さ評価の出現度数

	カード選択課題		箱選択課題	
	怖いもの	怖くないもの	怖いもの	怖くないもの
すごく怖い	1	0	1	0
ちょっと怖い	5	1	1	0
全然怖くない	17	16	14	24

ていたものの、多くの場合、「全然怖くない」と評価されており、子どもに深刻な怖さを与えるものではなかったことが確認された。

男女差に関して言えば、Table 3の怖いものに関して、「すごく」または「ちょっとだけ」怖いと評価した者の男女の内訳は、カードでは8名のうち6名が女兒であり、箱では4名のうち3名が女兒であった。また、Table 4の怖いもの選択に関して、同様の箱では2名のうち女兒は0名であったが、カードでは6名のうち5名が女兒であった。このように、カードや箱の実際の内容を見た後にそれを怖がる者は男児よりも女兒に多く見られ、女兒の方が男児よりも怖さを感じ易いことが改めて示唆された。

怖いもの選択の理由： 怖いもの／怖くないものを選択させ、実際の内容を確認させる前に、なぜそれを選択したのかを尋ねた。理由の説明の多くは、「だって見たかったから」など自己の欲求についての言及、「だって怖くないから」など選択した内容についての言及、「さっきは怖くないのにしたから、今度はこっち」など交互選択の法則についての言及のいずれかであったが、怖いものを選択した者の中には、怖いもの見たさの心理に言及した者も見られた。以下にその一部を紹介する(子どもの名前は仮名)。

「だって、怖い、面白いかなと思って」(年中男児)。「だってさ、怖いやつ、カイト、平気だもん。怖いやつ、ばあばが見ていいって言うもん」(年中男児)。「怖い、そんなの好きだから。雷とかはビビるけど。人間がおどかしてきた時に、心臓がギュってなるけど、ビビんな

いから」(年中男児)。「ミサコちゃん、お化けとか見たことない。だから見たい」(年中女児)。「だって怖くないから。怖いか(とって)のぞいてみたけど、怖くないから。オレ、怖いのが好き」(年長男児)。「全然怖くないのはそんなに面白くないし。ちょっと怖いの、見てみたいから」(年長男児)。「怖いか怖くないか、見てみたい」(年長女児)。

このように、本来であればネガティブな感情を喚起させる怖いものに対して、「面白い」「楽しい」「好き」などの幸福感情や「見たい」「知りたい」などの好奇心・探究心を示す言葉を使って理由を説明した者は10名ほど確認された(少なくとも1度は怖いものを選択した31名のうち)。人が幸福感情や好奇心・探究心を持って怖いものと向き合う時、そこには怖いもの見たさの心理が働いているものと考えられる。

実験2

方法

対象児： 三重県内の公立幼稚園3園に在籍する幼児82名(男児38名、女児44名、平均年齢5歳4ヶ月、年齢範囲4歳6ヶ月～6歳5ヶ月)を対象とした。内訳は、年中児38名(男児15名、女児23名)、年長児44名(男児23名、女児21名)であった。これらの幼児は単独条件38名(男児18名、女児20名)と複数条件44名(男児20名、女児24名)に分けられた。両条件の年齢比はほぼ同じであった。

材料： カード選択課題で使用されるカードは、すごく怖いカード、ちょっとだけ怖いカード、全然怖くないカードの3枚であった。すごく怖いカード(おとし)と全然怖くないカード(河童)は、実験1の怖いカードと怖くないカードで使用したものと同様であった。ちょっとだけ怖いカードは絵本作家・せなけいこ氏による絵であり、貼り絵による柔らかい線と明るい配色で妖怪が親しみ易く描かれていた(傘お化け)。カードのサイズや作りは実験1と同様であった。

手続き： 対象児に対して5分程度の個別またはペアによる実験を行った。対象児に名前、年齢、所属クラスについて尋ねた後、カード選択課題を行った。単独条件では対象児が1人で選択を行ったが、複数条件では対象児2人が共同で選択を行った。複数条件のペアの組み合わせに関しては事前に担任教諭に相談し、普段の保育の中で一定の関係のある者同士がペアとな

るよう配慮して組み合わせを行った。

なお、実験者（第2著者）は事前に1～2日間ほど協力園で対象児たちと一緒に過ごし、ラポールを形成した上で実験を行った。実験者は幼稚園教諭一種免許上の取得に関わる全ての実習を終了しており、幼児と関わることには慣れていていた。実験中の対象児による回答や様子は面接シートにその場で記入し、補完するためにICレコーダーでも記録した。

まず、実験者は今からカードを使った簡単な質問を行うことを対象児に伝えた後、3枚のカードを伏せた状態で提示し、順に指さしながら、「こちらのカードにはすごく怖いものが描かれています。こちらのカードにはちょっとだけ怖いものが描かれています。こちらのカードには全然怖くないものが描かれています」と言った。次に、「1枚だけ見ることができるとしたら、どれが見たい？」と尋ねた。対象児がいずれか1枚を選択すると、「どうしてそのカードを選んだの？」と選択理由を尋ね、対象児が理由を述べた後、実際にその内容を見るように求めた。対象児がカードの内容を見終わると、「見てみて、どう思った？」と尋ね、実際の内容に対する感想を求めた。さらに、残った2枚のカードに対して、「残りのカードも見てみたい？」と尋ね、対象児が「見てみたい」と回答すると、「どっちから見たい？」と尋ねた。対象児がどちらか一方を選択すると、実際にその内容を見るように求めた。最終的に、残った1枚のカードの内容も見ようように求めた。なお、配置するカードの並び順はランダムとした。

結果と考察

複数による対峙の効果： 怖いものに立ち向かうかどうかの判断が単独の状況ではなく複数の状況で求められた時、仲間がいる安心感によって挑戦意欲が高まり、怖いもの見たさ行動が増加するのかどうかを検討する。Table 5は、条件別及び男女別の選択パターンの出現度数を示したものである。単独条件と複数条件での選択の違いについて検討するために、2（条件）×3（選択）の χ^2 検定を行ったところ、有意傾向が確認された（ $\chi^2(2) = 5.63, .05 < p < .10$ ）。残差分析の結果、複数条件では単独条件よりも、「すごく怖い」選択が有意に多いことが示された（ $p < .05$ ）。また、年齢別にみると、年中児では有意差は見られなかったものの、年長児では有意差が見られた（ $\chi^2(2) = 6.17, p < .05$ ）。この

Table 5 単独／複数条件別及び男女別の各選択の出現度数

	単独条件			複数条件		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計
すごく怖い	4	2	6	10	6	16
ちょっと怖い	4	7	11	2	4	6
全然怖くない	10	11	21	8	14	22
合計	18	20	38	20	24	44

Table 6 中間選択あり／なし条件別及び男女別の各選択の出現度数

	中間選択あり条件			中間選択なし条件		
	男児	女児	合計	男児	女児	合計
すごく怖い	4	2	6	3	6	9
ちょっと怖い	4	7	11	-	-	-
全然怖くない	10	11	21	7	4	11
合計	18	20	38	10	10	20

注。「中間選択あり条件」は実験2の単独条件、「中間選択なし条件」は実験1のイメージなし条件・カード選択課題を指す。

ことは、単独の状況ではなく複数の状況で課題に対峙すると、特に年長児ほど、仲間がいる安心感から挑戦意欲が高まることを示唆するものであり、本研究の仮説3を支持するものであった。

中間選択の追加による効果： 中程度の怖さという中間の選択肢を追加した時、怖いもの見たさ行動が増加するのかどうかについて、実験1のイメージなし条件のカード選択課題の結果との比較から検討する。Table 6は、条件別及び男女別の選択パターンの出現度数を示したものである。実験1では中間の選択肢がなかったことから、実験2の「すごく怖い」と「ちょっと怖い」を合算して「すごく怖い／ちょっと怖い」の1カテゴリーとし、実験1の「すごく怖い」と比較する形で、2（条件）×2（カテゴリー）の χ^2 検定を行った。その結果、有意差は見られなかった。実験1の「すごく怖い」は20名中9名（45%）であったのに対し、実験2の「すごく怖い／ちょっと怖い」も38名中17名（45%）と同様の出現割合であった。つまり、強い怖さの一択に含まれていた者が、強い怖さと中程度の怖さの二択に分散されたに過ぎず、中程度の怖さの選択肢が追加されたからと言って、安心感が生じて挑戦意欲が増すというわけではないことが示された。仮説4は支持されなかった。

男女差： 男児は女児よりも怖いもの見たさ行動を示す傾向にあるのかどうか、及び、安心感にもとづく挑戦意欲の操作による影響の受け

方は、男女によって異なるのかどうかを検討する。

まず、単独か複数かという条件ごとの男女差について検討するために、Table 5の結果をもとに、条件ごとに2（性別）×3（選択）の χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意差は見られなかった。また、男女ごとに単独か複数かによる影響を探るために、男女ごとに2（条件）×3（選択）の χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意差は見られなかった。さらに、年齢別に分けて男女ごとの単独か複数かによる影響を探ったところ、年中児では男女ともに有意差は見られなかったが、年長児では男児のみにおいて有意差が見られた（ $\chi^2(2) = 6.24, p < .05$ ）。年長男児では、「すごく怖い」選択は単独条件で12名中3名（25%）であったのに対し、複数条件では11名中8名（73%）と多く見られ、残差分析の結果、年長男児では複数条件の方が単独条件よりも「すごく怖い」選択を有意に多く行ったことが示された（ $p < .05$ ）。なお、他の選択の出現度数は、「ちょっと怖い」選択が3名と0名、「全然怖くない」選択が6名と3名であった（それぞれ単独条件、複数条件の順）。このことは、単独ではなく複数で怖いものに立ち向かうという状況に置かれた時、女児ではそうではないものの、男児で、特に年長児では、仲間がいる安心感から挑戦意欲が高まることを示唆していると言える。

次に、中間選択の有無ごとの男女差について検討する。先述と同様に、実験1では中間の選択肢がなかったことから、実験2の「すごく怖い」と「ちょっと怖い」を合算して1カテゴリーとし、実験1の「すごく怖い」と比較する。また、条件ごとの男女差に関する検定はすでに行っているため、ここではそれらを省略し、男女ごとに中間選択の有無による影響について、Table 6の結果をもとに、男女ごとに2（条件）×2（選択）の χ^2 検定を行った。その結果、男女いずれも有意差は見られなかった。

残ったカードの選択： 最初の選択の後、残った2枚のカードについて、もしも見ることでできるとしたらどちらを見たいかを尋ねた。選択結果は、2枚のカードのうちより怖いものを選択するか、より怖くないものを選択するかのいずれかに分けられた。単独条件では、38名中20名（53%）がより怖いものを選択し、複数条件では、44名中24名（55%）がより怖いものを選択した。2（条件）×2（選択）の χ^2 検定を行っ

た結果、有意差は見られなかった。男女で比較すると、単独条件でより怖いものを選択した20名の内訳は、男児10名、女児10名であり、より怖くないものを選択した18名の内訳は、男児8名、女児10名であった。また、複数条件ではより怖いものを選択した24名の内訳は、男児14名、女児10名であり、より怖くないものを選択した20名の内訳は、男児6名、女児14名であった。条件ごとに2（性別）×2（選択）の χ^2 検定を行った結果、それぞれ有意差は見られなかった。以上から、残ったカードの選択に関しては、怖いもの選択の量に条件や男女による違いはないことが示された。

複数条件でのペアの組み合わせの違い： 複数条件では、最初に個人の選択希望を尋ねた後、両者の希望が不一致であった場合、協議して最終的に1つの選択を決定するよう求めた。選択希望が不一致であったペアは22組中13組（59%）であり、そのうち最終的により怖いものを選択したペアは5組であった。男女で比較すると、組み合わせは男児ペア8組、女児ペア10組、混合ペア4組であり、そのうち不一致のペアは、男児ペア4組、女児ペア6組、混合ペア3組であった。男児ペア3組、女児ペア2組がより怖いものを選択した。混合ペア3組では、いずれもより怖くないものを選択した男児に、女児が最終的に合わせていた。以上から、ペアの組み合わせに関して、年齢や男女による違いは特に見当たらなかった。

なお、カードの選択理由と実際の内容に対する感想については、研究1の結果とほぼ同様のため、ここでは詳細については省くこととする。

総合考察

本研究では、怖いもの見たさ行動は幼児期の終わりまでに増加するものの、年長児でも怖いものを多くは選択しないことを示した富田・野山（2014）の研究結果を受けて、幼児の怖いもの見たさ行動を規定する要因は何かを検討することを目的とした。虚構と現実との区別が徐々に可能になり、単独での怖いもの見たさを楽しむ始めると考えられる4-6歳児を対象に、考えられる要因として想像の利用可能性と安心感に基づく挑戦意欲の2つを取り上げて検討した。併せて、男女による違いについても検討した。以下では、これら2つの効果について、男女による違いの観点も交えながら、得られた結果について順に考察する。

まず、研究1では、想像の利用可能性に関する操作として、事前に怖いもの／怖くないもののイメージを提示し、怖いものについての想像の利用可能性を低下させる操作を行った。その結果、イメージあり条件ではイメージなし条件と比べて、怖いもの選択が有意傾向で多く確認された。また、こうしたイメージ提示による効果は、女兒では見られないのに対して、男児では顕著に見られることが分かった。つまり、男児では怖いものについてのリアリティが少しでも低下すると、怖いものにより積極的に挑戦するようになることが示唆された。

また、想像の利用可能性に関するもう1つの操作として、想像の投射先をカードではなく、より空間的な拡がりのある箱にするといった変化を加え、怖いものについての想像の利用可能性を上昇させる操作を行った。その結果、箱選択課題ではカード選択課題と比べて、怖いもの選択がより回避されるといった傾向は、幼児全体では見られなかったものの、男女間で比較すると、箱選択課題では、女兒は男児よりも怖いもの選択を避けるということが有意に多く確認された。つまり、女兒では怖いものについてのリアリティが少しでも上昇すると、怖いものを選択するという行動により拍車がかかることが示唆された。

これらの結果は、第1に、Harris (2000) が提唱した想像の利用可能性仮説を、これまでとは異なる視点から拡張する証拠を示したという点で評価できよう。怖いものを想像し、それと立ち向かうかどうかの判断を求められるような状況においても、想像の利用可能性は関与していることが本研究の結果から示唆された。今後、幼児期の子どもにおける怖いもの見たさ行動を査定する上では、想像の利用可能性は重要な視点の1つとなるであろう。

第2に、想像の利用可能性仮説の操作により、怖いものについてのリアリティが低下すると男児がそれに対してより積極的に挑戦するようになり、逆に上昇すると女兒がそれをより避けるようになるという結果は、幼児の日常の姿と照らし合わせても、極めて興味深い結果であると言える。筆者自身も、保育園での想像的探険遊びの参与観察において、同様の場面に遭遇したことがある。それは、普段散歩に出かけている山の奥の方に、実は鬼が住んでいることを示唆する手紙が届いたことをきっかけとして、年長児たちが山に鬼探しの探険に出かけた時のこと

である。普段あまり通ったことのない道が何だか薄暗く、いかにも鬼がいそうな気配が感じられた時、行きたくないと思いだした者は、その多くが男児ではなく女兒であった。そこから別の馴染みのある道を選択して進み始めた時、周囲の環境に対して果敢に探索を繰り返した者は、その多くが女兒ではなく男児であった。本研究の結果は、こうした日常の保育の中で異なる男女の姿に、一定の説明を与えるものであると言えよう。

次に、研究2では、安心感に基づく挑戦意欲に関する操作として、課題に単独ではなく複数で取り組む条件を設定し、仲間がいる安心感から怖いものに立ち向かう行動が増加するかどうかを検討した。その結果、複数条件では単独条件と比べて、「すごく怖い」選択が有意に多く確認された。また、こうした仲間がいることによる伸びは、特に年長男児において顕著に見られることが分かった。つまり、年長男児では、怖いものに立ち向かうという状況に置かれた時、仲間がいることの安心感が怖いものへの挑戦をより後押しすることが示唆された。

また、安心感に基づく挑戦意欲に関するもう1つの操作として、中程度の怖さの選択肢を加えることで、怖いもの選択への安心感を生じさせる操作を行った。従来の二者択一の選択肢で行った研究1のイメージなし条件の結果と比較したところ、中程度の怖さの選択肢の追加によって怖いもの選択が増加するという結果は得られなかった。

仲間がいることで怖いものへの挑戦が促されるという結果は、先述と同様に、幼児の日常の姿と照らし合わせると、極めて興味深い結果と言える。こうした子どもの姿自体は、これまでも想像的探険遊びに関するいくつかの保育実践記録の中で報告されてきたが (e.g., 安曇・吉田・伊野, 2003; 岩附・河崎, 1987; 吉田, 1997), 実証的な知見は示されてこなかった。そこに確かな証拠を提供したという点で、本研究の結果は意義があると言えよう。さらに、そうした姿が女兒ではなく男児に、そして年中児ではなく年長児において、より活発に見られるという点もまた重要である。子どもは4, 5歳頃になると仲間をそれまで以上に強く意識するようになり、とりわけ男児は仲間に対して自らの力や勇ましさを誇示するようになることが示されている (西川, 2003)。年長男児は仲間がいることで単に安心感を得るだけではなく、仲

間の前で自らの力や勇ましさを示したいと願うことで、つまり、仲間に対して「怖がりだと思われたくない」という考えが生じて、あえて怖いものを選択した可能性も考えられる。怖いものと対峙するという状況において、仲間の存在が子どもにとってどのような役割を果たすのかは、今後より詳細に検討する必要がある。

本研究で最も怖いもの見たさ行動が示されたのは、研究1のイメージあり条件のカード選択課題(70%)であり、怖いものについての想像の利用可能性が低下すればするほど、子どもは安心して怖いものに取り組みやすくなるのが示された。しかし、安心がそのまま楽しみにつながるとは限らない。怖いものを楽しむためには、ある程度の怖さも必要であろう。そのことは怖いものを選択した子どもの理由の説明からもうかがえる。最も怖いもの見たさ行動が少なかったのは、研究1のイメージなし条件の箱選択課題(30%)であり、怖さの注入において怖いものについての想像の利用可能性の上昇が一方で効果的であることを示している。本研究の結果は、保育において怖いものを楽しむ遊びを実践するのに必要な手立てを考えていく上で、有効な示唆を与えるに違いない。

最後に、今後の課題について述べる。実験1では、怖いものとして絵カードや箱に入ったフィギュアを使用したが、実際の内容を見た直後の感想や怖さの程度の評価では、それを怖いものとして捉えている者は少なかった。本研究は実際の内容を見る前に、怖いとされるものと怖くないとされるもののうち、どちらをより見たいかを尋ねているため、実際の内容の怖さの程度は選択判断に影響を及ぼさないものの、怖い想像の利用可能性に対する本研究の実験的操作が真に機能していたかどうかについては疑問が残された。「怖くなかった」という回答の多さに関しては、文字通り怖くなかった可能性以外に、単にネガティブな感情(怖い)よりもポジティブな感情(怖くない)の方が良いという価値判断からそのように回答した可能性や、実験者に怖がりだと思われたくないとの考えからそのように回答した可能性も考えられる。怖いものについての想像の鮮明さや想像上の恐怖対象に対して怖さを感じる程度は恐らく個人によって異なっており、直後の感想や怖さの程度の評価ではそれらを十分に把握できたとは言えない。従って、今後は幼児が実際に感じた怖さをどのようにして測るかが課題であると言えよう。

また、実験1では、怖い想像の利用可能性の影響を探るために、事前のイメージ提示の有無と想像を投射する対象の空間的拡がりの違いという2つの実験的操作を行ったが、これらが真に幼児の怖い想像の利用可能性を揺さぶるものとなっていたかどうかについても、さらに検討が必要であろう。本研究では、これらは男女で異なる効果が確認されたが、これら異なる怖いものへの接近一回避行動は想像的活動に従事することによって生じたというよりも、単に接近一回避欲求の高まりによって誘発された行動に過ぎない可能性も考えられる。幼児の怖いもの見たさ行動に想像がどのように関与しているかは、今後も実験的操作の方法を工夫しながら検討していく必要がある。

さらに、実験2では、仲間の存在が安心感を生じさせ、怖いものに立ち向かい易くなるのではないかという仮説について検討するために、複数条件を設定したが、ここでの複数条件とは単に2人組に過ぎず、二者関係での仲間の存在の影響が検討されたに過ぎなかった。來山(2016)の研究では3~5人のグループによる検討が行われており、その際には仲間同士の選択希望の不一致により、激しい対立や葛藤が生じていた。他方、2人組で行った本研究では、不一致は見られたものの、激しい対立や葛藤は確認されなかった。保育現場において実際に怖いものと立ち向かい挑戦する取り組みが行われる場合、その人数規模は2人とは言わず3~5人あるいはそれ以上など、より大きな規模で行われることが多いであろう。その点を考えると、今後は統制された状況下で、より大きな人数規模で行った場合に、どのような選択判断が行われるかを探ることも必要であろう。

文 献

- 安曇幸子・吉田裕子・伊野緑。(2003). だた! かつばおやじの舞台裏:扉を開いた保育園. 東京:サンパティック・カフェ.
- DiLalla, L. F., & Watson, M. W. (1988). Differentiation of fantasy and reality: Preschooler's reactions to interruptions in their play. *Developmental Psychology*, **24**, 286-291.
- Flavell, J. H., Green, F. L., & Flavell, E. R. (1986). Development of knowledge about the appearance-reality distinction. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **51**, Serial No.212.

- Harris, P. L. (2000). *The work of the imagination*. Malden, MA: Blackwell.
- Harris, P. L., Brown, E., Marriott, C., Whittall, S., & Harmer, S. (1991). Monsters, ghosts, and witches: Testing the limits of the fantasy-reality distinction in young children. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 105-123.
- Hurlock, E. B. (1971). 児童の発達心理学(上巻) (小林芳郎・相田貞夫・加賀秀夫, 訳). 東京: 誠信書房. (Hurlock, E. B. (1964). *Child Development* (4th ed.). New York: McGraw-Hill.)
- 今井和子. (1990). 自我の育ちと探索活動: 3歳までのあそびと保育. 東京: ひとなる書房.
- 岩附啓子・河崎道夫. (1987). エルマーになった子どもたち: 仲間と眺め, 心踊る世界に. 東京: ひとなる書房.
- Jersild, A. T. (1974). ジャーシルドの児童心理学 (大場幸夫・斎藤謙・沢文治・服部広子・深津時治, 訳). 東京: 家政教育社. (Jersild, A. T. (1968). *Child Development* (5th ed.). New Jersey: Prentice-Hall.)
- Johnson, C. N., & Harris, P. L. (1994). Magic: Special but not excluded. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 35-51.
- 來山遥香. (2016). 幼児のグループは怖いカードを選択するか: 怖いもの見たさの心理の発達. 平成27年度京都華頂大学家政学部現代家政学科卒業論文 (未公刊).
- 西川由紀子. (2003). 子どもの自称詞の使い分け: 「オレ」という自称詞に着目して. *発達心理学研究*, **14**, 25-38.
- 田代康子. (2001). もっかい読んで!: 絵本をおもしろがる子どもの心理. 東京: ひとなる書房.
- Taylor, B., & Howell, R. J. (1973). The ability of three-, four- and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, **122**, 315-318.
- 富田昌平. (2016). 2歳児クラスにおける想像上の怖いものを楽しむ遊び: その展開過程と保育者の働きかけ. *心理科学*, **37**, 21-30.
- 富田昌平. (2017). 幼児期における恐怖対象の発達の变化. *三重大学教育学部研究紀要 (教育科学)*, **68**, 129-136.
- 富田昌平. (2018). 保育における想像的探険遊びの展開: エルマー実践から30年の節目を越えて. *心理科学*, **39**, 74-89.
- 富田昌平・野山佳那美. (2014). 幼児期における怖いもの見たさの心理の発達: 怖いカード選択課題による検討. *発達心理学研究*, **25**, 291-301.
- Wellman, H. M., & Estes, D. (1986). Early understanding of mental entities: A reexamination of childhood realism. *Child Development*, **57**, 910-923.
- 吉田直美. (1997). みんな大人にだまされた!: ガリバーと21人の子どもたち. 東京: ひとなる書房.

付 記

本論文は、第2著者と第3著者が三重大学教育学部に提出した卒業論文(2017年度、2018年度)に、第1著者が新たにデータを加えて再分析し、新たに論を展開したものです。本研究にご協力いただいた幼児及び先生方に深く感謝申し上げます。また、本論文は執筆にあたり、平成29年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号:17K04351)の助成を受けた。